

○八郎の宿

上淀川が宿場として栄えていた頃という

毎年瓢然とあらわれ、奥まつた部屋を所望し、翌朝大枚の金子を払つて旅立つてゆく僧がいた。こんなことが数年つづいたため、貧乏な宿屋はだんだん繁昌していった。

ある年のこと、また僧があらわれ奥まつた部屋を所望し、決して部屋をのぞかないでほしいといつて部屋に入つた。ところが女中があやまつて部屋に入つたところ、大きな蛇が金の屏風に鎌首をもたげて眠つていた。女中は悲鳴をあげ腰をぬかしてしまつた。家の人達が驚いて集まつた頃はもう僧が介抱していた。

翌朝いつもの如く金子をおいて僧は旅立つていったが、翌年から僧はこなくなり、繁昌していた宿屋もまた元のように貧乏になつたという。同じような伝説は境にもあり、また、西明寺、中川、神宮寺、土川、秋田市などにもある。